

説 教 『聖霊が啓く真なる故郷の言葉』 山本 護牧師
聖 書 創世記 11:1~9/使徒言行録 2:1~6

聖霊降臨節には毎年、使徒言行録2章の冒頭を読んでいる。同じ箇所だが、今年は語句の意味を細かく解説するのではなく、この箇所を大掴みにして、なんとかひと塊のまま掘り出してみたい。

五旬祭に「一同が一つになって集まっている(使徒 2:1)」と、「一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した(2:4)」。一つに集まり、多様な言語で話す。おもしろい。特定の民族が意識される以前、遠い昔の「バベルの塔」とまるで反対ではないか。「世界中は同じ言葉を使って、同じように話していた(創世 11:1)」。現代のグローバル化同様、覇権は同じ言葉と同じ価値観を強要し、際限なく傲慢になるがゆえに(11:6)、「主は彼らをそこから全地に散らされた(11:8)」。

弟子たちは、復活のイエスに出会っても(使徒 1:3)、召天される姿を見送っても(1:9)、なお呆然としていた(1:11)。ところが、激しい風音を伴った(使徒 2:2)「霊=ruah=風」に吹かれることで個々の燐りは炎となって燃えあがる(2:3)。ホダで燃やしつけても1本の薪は焦げる程度。2本でも燐るくらい。だが4~5本の薪は干渉し合って炎となる。キリスト者という複数の薪は、集められ、祈りを共にし、聖霊の風を受けて燃えあがる。このことは、各々の価値や言葉を失うことではない。むしろ逆だ。世間や自己愛に抑え込まれていた真の自分が、解き放たれ、露わになることでもある。この絶妙な感じを柔らかく掴んでほしい。祈りを共にする者は、かえって同調者を求めず、ただ一人で自分の言葉を発する(2:4)。共に祈る者の言葉は分からない(2:4)。私自身と、聖霊だけがその言葉を受け止める。

集められた私たちが、共に祈ることは必要だ。しかし、どうか間違えないでほしい。それは聖霊を招来するための呪法ではない。儀式や方法では絶対でない。私たちは、イエスの言葉やふるまいに心ふるわせ、弟子たちがそうだったように、イエスという人格に信頼を置く。そうした意味からも、私たちは弟子の一人ではある。それでは十字架はどうなのか。全財産を捨てて従った弟子たちでさえ、十字架はまったく不可解な結末だった。それどころか復活に遭遇してさえも、彼らは無理解であった。だが五旬祭、弟子たちは一つになって祈り(2:1)、聖霊を受け(2:3)、ようやく自分の内部にあった己が霊の言葉を(2:4)、私自身の言葉を得た(2:6)。つまり十字架の奥義を受け取れ、復活の力は啓かれた。

教会は、祈りを共にして聖霊を受ける場。聖霊を受けるとはどういうことか。己を虚しくしてキリストなる神を主体とすること。人は己を手放し、バベルの塔のような権威権力、あるいは偽りの自己愛に仕えてしまいやすい。聖霊の炎は真の主体性。分かれわかれに、一人ひとりのものとなる(2:3)。

聖霊に吹かれる時、人はその響きを、己が根っこにある故郷の言葉として聞く(2:6)。暮らしを資するための外国語(2:5)ではない。霊によって、私自身の霊(マ 8:16)の言葉を聞く。私たちには足場があるゆえ、落ちた兄弟を引きあげることができる。落ちた私は自分を引きあげることではできず、共に祈る姉妹に引きあげてもらいより他ない。一つなる祈りによって、真なる故郷の言葉を得る(使徒 2:6)。



【おまけのひとこと】

祈りを共にする者は 友情を必要としない 理解者を必要としない 灯を必要としない 孤独ではないから 教会は祈りを共にする目じるしか そうかもしれない 世が必要とするものは何もない